

足利の障害者施設療育賞

重症心身障害者施設の優れた実践研究を表彰する「第17回読売療育賞」（読売光と愛の事業団主催）に、あしかが通園センター（足利市大沼田町）が選ばれた。同センターの保育士で、実践内容を発表した坂井千明さん（32）は「重い障害のある人たちが今後とも楽しんで日常生活を送ることができ、心身の機能向上につながる取り組みに挑戦していきたい」と受賞を喜んだ。

感覚刺激「海」疑似体験

同センターは、県南や群馬児・者52人が通園し、日々の活動を通して運動機能

や生活動作の維持向上に取り組んでいる。今回、身の回りの物を活用して視覚や聴覚、触覚などさまざまな感覚を刺激し、利用者が「海」を疑似体験できるようにした取り組みが評価された。

きっかけは2019年9月、センターで開かれた大手精密機器メーカー「セイコーエプソン」による社会福祉活動「ゆめ水族園」だった。同社の主要製品のプ

ロジェクターを使い、水中の映像を壁や天井、床に映し出して水族館の雰囲気を楽しんでもらうというもの。体験した職員や利用者からは「1日では足りない。またやってほしい」との声が寄せられた。

その後、新型コロナウイルスの感染拡大で利用者が外出できなくなったこともあり、坂井さんから職員が、施設にあるプロジェクターを使ってゆめ水族園を参考にした取り組みを始めた。

海をテーマに、「浜辺」「感触」「海中」の三つのエリアに分けた空間を用意し、昨年4月から11月にかけて、利用者や職員の感想を基に試行錯誤を重ねて計13回実施した。どのような障害があっても利用者が「海」を感じられるよう、各感覚器官をまんべんなく刺激する工夫を凝らした。

浜辺では映像と波の音を流す以外に、柔らかさの異なるスポンジを布製の袋に入れて敷き、その上を車いすで進むことで砂浜を散歩する感覚を再現した。感触エリアでは冷却シートに水を吸わせてナマコに見立て、海中エリアではつるしたシーツに映像を投影し、扇風機で揺らして波を表現

した。保護者からは「楽しそうだった。興味津々で夢中になったり、家では見られない子どもの表情を見るのができてうれしい」と好評だという。月に1回程度、日常の活動に取り入れており、最近では、森や東京ディズニーランドなど新しいテーマ設定にも取り組んでいる。

坂井さんは「心と体は連動しており、楽しめたり、快適に過ごせたりするのは利用者の運動機能にとって大切。保護者の意見も取り入れ、もっと楽しい体験ができるものにしていきたい」と意欲をみせた。

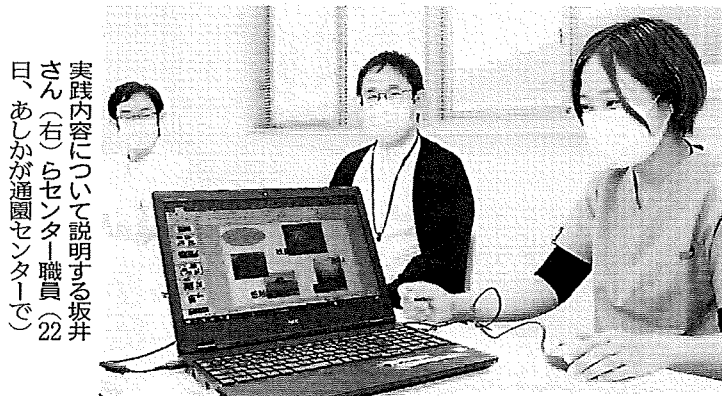
高校生向けに税のクイズ大会

宇都宮税務署など

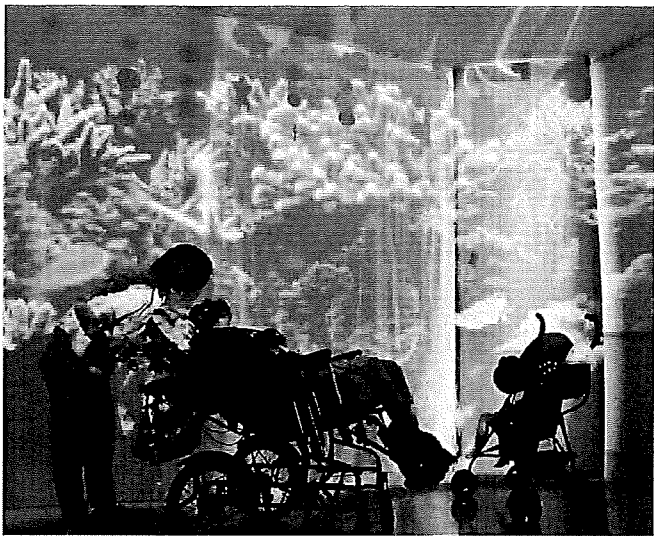
宇都宮税務署と宇都宮法人会女性部会は、宇都宮海星女子学院高校（宇都宮市上籠谷町）で、生徒に税金の仕組みを学んでもらうクイズ大会を開いた。

参加した46人の生徒は、12チームに分かれて〇×形式で正答数を競った。全22問で、税法の定められ方や国の歳出の内訳に関する問題などを出題。「世界には税金のない国もある」という問題では、全チームが「〇」と答えて正解したが、リン鉱石の輸出で資金を得たナウル共和国に税金がないという豆知識が紹介されると、驚きの声が上がった。

同税務署の茅野純也副署長は「税を楽しんで学んでもらえた。税金の使い道である社会保障などについて、若者に考えてもらおうきっかけになれば」と話し、参加した1年生の海老原耶々さん（16）は「税金は難しいものと考えていたけど、私たちの生活をよくするためのものだと知った。今後どんな税があるのか調べてみたい」と語った。



実践内容について説明する坂井さん（右）らセンター職員（22日、あしかが通園センターで）



6月の活動の様子。利用者はカラフルなサンゴ礁と魚が泳ぐ海の中の映像を楽しんだ（あしかが通園センター提供）



税金に関するクイズに解答する生徒たち（19日、宇都宮海星女子学院高校で）